

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月8日現在

機関番号：32711

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520166

研究課題名（和文） ゴシック・リヴァイヴァルとラファエル前派—建築と絵画の芸術文化的総合

研究課題名（英文） Gothic Revivalism and the Pre-Raphaelites: Artistic-Cultural Synthesis of Architecture and Painting

研究代表者

近藤 存志 (KONDO ARIYUKI)

フェリス女学院大学・文学部・教授

研究者番号：00323288

研究成果の概要（和文）：19世紀イギリスの建築分野におけるゴシック・リヴァイヴァルの流行と、絵画分野に興ったラファエル前派はともに、国際化著しい当時のイギリス社会に芽生えた「イギリス人意識」や、イングランド国教会内に興隆したアングロ・カトリシズムなど、当時の時代精神の諸相と深く結びつきながら展開した。本研究は、建築と絵画に同時代的に興ったこれらの中世主義的芸術運動を、同一の時代精神の芸術文化的表現として検討し、中世のキリスト教的社会と芸術創造環境の再興を模索した総合芸術運動として確認した。

研究成果の概要（英文）：Gothic Revivalism in architecture and the Pre-Raphaelite brotherhood in painting have certain fundamentals in common, e.g., visual and/or spatial reflections of the newly emerged and widely enhanced Victorian desire to embody national identity (i.e., “Britishness”) and active artistic responses to the rise of Anglo-Catholicism in the Church of England. Through close study of such fundamentals, we can determine exactly what medievalism in Victorian art means. The aim of this research was to examine Christian-orientated Medievalism in both Victorian architecture and painting as a synthesised expression of the spirit of the age, and to establish it as an artistic-cultural movement which sought the full restoration in nineteenth-century Britain of a medieval-spirited Christian society and the ways in which artists (architects and painters) could devote themselves to the arts.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：ゴシック・リヴァイヴァル ラファエル前派 アングロ・カトリシズム オック
スフォード運動

1. 研究開始当初の背景

同一時代に興隆した芸術諸分野の展開を時代精神の表出として総合的に理解しようとする視点は、これまで19世紀イギリスの

ヴィクトリア朝時代の芸術については十分になされてきたとは言えない。19世紀イギリスの絵画や建築に顕著に現われた「中世趣味」や「中世回帰的傾向」については、主に、

ラファエル前派に関する絵画史研究や、ゴシック・リヴァイヴァルの建築史的研究において、それぞれの芸術分野の枠内で扱われていた。本研究は、19世紀イギリスに興ったアングロ・カトリシズムの流行やカトリック信仰の拡大に注目することで、ラファエル前派の絵画運動と同時代のゴシック・リヴァイヴァルの双方を、中世を理想化するにいたった19世紀イギリスの同一の時代精神の表出として捉え、建築や絵画、デザインといった芸術諸分野の枠組みを越えたヴィクトリア朝期イギリスの「芸術の相互作用的（インタラクティブ）な性格」を考察の対象とした。

2. 研究の目的

本研究課題の第一の目的は、19世紀イギリスにおいて同時代的に展開したゴシック・リヴァイヴァルのデザイン運動とラファエル前派の絵画運動に共通して見出される中世復興主義的傾向が、19世紀中葉のイギリス社会を席卷した時代精神の表出であったことを論証することにあつた。第二の目的は、ヴィクトリア朝期イギリスに同時並行的に興った中世復興主義的芸術諸運動を、建築や絵画といった分野上の枠組みを超えた中世のキリスト教的社会と芸術の関係（中世における信仰と芸術の関係）の再興を模索した総合芸術運動として確立することにあつた。

3. 研究の方法

本研究では、ゴシック・リヴァイヴァルのデザイン運動とラファエル前派に共通する19世紀的精神について、1) ヴィクトリア朝芸術における中世趣味・ゴシック主義の系譜、2) ヴィクトリア朝芸術にアングロ・カトリシズムが与えた影響、3) 中世を理想化するにいたった精神構造、の三つの視点から検討した。その際、書簡、日記、手記など、これまで主として個々の芸術家の伝記的な研究において用いられてきた一次資料を丁寧に読み解くことで、建築や絵画といった個々の芸術分野の違いを超えて横断的に結びついていた当時の芸術家人脈と、中世趣味に傾倒した芸術家、美術批評家、聖職者の系譜を整理した。また、建築家や画家が構想過程で描いたスケッチ等を重視し、個々の絵画作品や建築物の構想にヴィクトリア朝期イギリスの時代精神、とりわけ中世のキリスト教的社会と芸術創造環境を理想化するにいたった精神構造が与えた影響について検討した。研究成果については、学術論文の執筆の他、北米ヴィクトリア朝研究学会（North American Victorian Studies Association）および国際デザイン史・デザイン学会議（International Conference on Design History and Design Studies）等での研究発表を通して行った。

4. 研究成果

(1) ヴィクトリア朝芸術における中世趣味・ゴシック主義の系譜

19世紀イギリスにおいて中世のキリスト教的社会と芸術のあり様を範に自らの創作活動を展開した芸術家たちは、しばしば情熱的キリスト教信仰を内的エネルギーとして旺盛な芸術創作活動を展開した。この言わば芸術の世界におけるキリスト教信仰活性化の試みとも呼び得る一群の芸術家たちの創作活動は、ただ突如として近代イギリス社会に同時発生的に現れたわけではなかった。同時代のイギリス・キリスト教会の中に、芸術家たちの信仰を強く刺激するキリスト教宣教運動が大きくなうねりのように興きており、諸運動を指揮した人々と芸術家たちとのネットワークが形成されていたからである。

イングランド国教会からは広教会運動が生まれ、労働者大学を設立するとともにキリスト教社会主義運動を推進したJ・F・D・モーリス（John Frederick Denison Maurice, 1805-72）や、名説教家として知られたF・W・ロバートソン（Frederick William Robertson, 1816-53）らが広教會的キリスト教信仰の拡大に積極的な役割を果たした。イングランド国教会のカトリック的伝統を重視する立場からは、オックスフォード運動やトラクタリアン運動などの呼称で知られる信仰復興運動が、さらにはアングロ・カトリック派が誕生することになった。オックスフォード運動は、その指導者であったJ・H・ニューマン（John Henry Newman, 1801-90）らのカトリック改宗を契機に短い期間で終焉を迎えることになったが、イングランド国教会内に留まったアングロ・カトリック派は礼拝と神学においてカトリック的伝統を再興させるとともに、それまで国教会の宣教対象の外に忘れ去られていた貧困層へ献身的奉仕を実践し、結果的に下層階級の間でのキリスト教信仰の拡大に大きく貢献することになった。

無論、19世紀イギリスにおいて信仰活性化が図られたのは、イングランド国教会ばかりではなかった。非国教会派でも、メソヂスト派が大幅に信徒数を増やしたのをはじめ、会衆派やバプティスト派などの諸宗派が勢力を拡大した。またメソヂスト改革派出身のW・ブース（William Booth, 1829-1912）が福音主義的伝道と旺盛な慈善活動を謳い救世軍を創立したのも19世紀イギリスにおいてであった。ローマ・カトリック教会では、N・ワイズマン（Nicolas Wiseman, 1802-65）らを中心にカトリック復興運動が興隆し、イギリスにカトリック司教制度が再建されている。

19世紀イギリスのクリスチャン芸術家たちの中には、こうした諸教会、諸宗派の信仰活性化運動を指揮した聖職者たちと、直接な

いし間接的に交流を持った者が少なくなかった。熱心なアングロ・カトリシズムのキリスト教信仰の持ち主で、ラファエル前派にも影響を与えた画家W・ダイス (William Dyce, 1806-64) は、19世紀イギリスのローマ・カトリック教会の発展に指導的役割を果たしたワイズマンと交友関係にあった。ダイスは、19世紀イギリスの芸術をめぐる現世的傾向に「息苦しさ」を感じ、純粋なキリスト教芸術の創造を追求する決意をワイズマンに表明し、一方のワイズマンもダイスのキリスト教的創作姿勢を後援することになり熱心であった。現在アバディーンのアート・ギャラリーが所蔵するダイス関連の書簡コレクションには、ワイズマンがローマからダイスに書き送った1838年6月29日付の書簡が含まれており、この書簡の中には「私 (ワイズマン) は近いうちにピュージン氏に手紙を書いて、もし (大聖堂建設のような) 壮大な事業が彼の手によって進行中であれば、あなたをその事業に関わる諸問題を検討するメンバーに加えてくれるよう全力で彼に勧めることにしましょう。もうすでに私の方の判断で、あなたの能力に見合った何かしらの芸術的事業が実施されそうな幾つかの方面であなたの名前を出しています。」(Aberdeen Art Gallery, Dyce Papers: Chapter V, N. Wiseman to W. Dyce, 29 June 1838.) との記述もある。

W・H・ハント (William Holman Hunt, 1827-1910) も、広い意味でワイズマンの芸術界との接点から恩恵を受けたひとりであった。彼は自らの画風を確立する過程でJ・ラスキン (John Ruskin, 1819-1900) の『近代画家論』(Modern Painters, 1843-60) から大きな影響を受けたことが知られているが、ハントが直にこの書を読む機会を得たのは、ロイヤル・アカデミー付属学校での知人を介して当時ワイズマンが所有していたものを貸借することができたからであった。

ゴシック・リヴァイヴァルの代表的建築家A・W・N・ピュージン (Augustus Welby Northmore Pugin, 1812-52) は、彼自身がカトリック改宗者であったこともあり、より一層ワイズマンとは深い関わりを持った。ピュージンが中世イングランドのカトリック教会でかつて用いられていた祭服を再現した際には、ワイズマンがそれを実際に着用してミサを執行し、その様は当時少なからず人々の関心を集めた。J・E・ミレイ (John Everett Millais, 1829-96) やC・A・コリンズ (Charles Allston Collins, 1828-73) といった画家たちも、ワイズマンが着用する祭服を見ることを目的のひとつとしてカトリック教会のミサに参列している。

オックスフォード運動の指導者J・H・ニューマンも、同時代の芸術家たちに少なからず影響を与えた。ピュージンはニューマンに

よるイングランド国教会のカトリック的伝統の強調を、彼自身が推し進めていたゴシック・リヴァイヴァル——より厳密にはイングランド宗教改革以前の中世キリスト教信仰が育んだゴシック芸術の再興——と連携した動きと見做していた。また、ラファエル前派の第二世代の代表格E・C・バーン=ジョーンズ (Edward Coley Burne-Jones, 1833-98) は少年時代からニューマンの言葉に親しみ、その教えによって物質主義的時代に抵抗する芸術家として生きる決意を固めたことが知られている。

オックスフォード運動の発展と拡大に重要な役割を果たし、ニューマンがローマ・カトリック教会に改宗後はイングランド国教会にとどまりながらアングロ・カトリック派の立場から信仰復興運動を指導したE・B・ピュージー (Edward Bouverie Pusey, 1800-82) も、その予型論的聖書解釈がミレイをはじめとする同時代の画家たちの絵画制作に着想を与えた可能性が指摘されている。

近代という世俗的、物質主義的時代を生きながら、中世のキリスト教的社会と芸術のあり様を範として、真正なキリスト教芸術 (絵画、建築) の制作、実現をめざした芸術家たちの挑戦は、19世紀イギリスのキリスト教会に興隆した信仰復興と信仰活性化を目指す諸運動を指揮した教会指導者たちとの接点を維持しながら、絵画や建築といった分野上の差異を超えた総合芸術運動として展開したのである。

(2) ヴィクトリア朝芸術にアングロ・カトリシズムが与えた影響——ミレイ画《両親の家のキリスト》を一例に

A・W・N・ピュージンの厳格なキリスト教的中世主義は、「信仰生活のかたちと信仰そのものとの間には、最も密接な関係が存在し、建築的・形態的伝統を尊重することがなくなれば、神聖な聖体拝領の規律における内的信仰を維持することはほとんど不可能である」という不変の信念に基づいていた。その過激な中世主義のゆえにきわめてエクセントリックな存在とみなされていたピュージンであったが、彼の〈宗教的儀式のあり様と信仰そのものは分かち難い連関関係にある〉という信念は、19世紀中頃のイギリスにあってイングランド国教会の中でも特にアングロ・カトリシズムに傾倒していたヴィクトリア朝中期の芸術家たちの目には魅力的なものに映った。

ラファエル前派の結成メンバーの一人、J・E・ミレイも少なくとも一時期、アングロ・カトリシズムに強い関心を示していた。彼はオックスフォード大学出版局クラレンドン・プレスの最高責任者でアングロ・カトリシズムの信仰の持ち主であったT・クーム (Thomas Combe, 1796-1872) と親交があり、

クーム夫妻とともにアングロ・カトリック派の礼拝に出席することもあった。ミレイ自身が書き残した書簡の記述からは、彼が1850年の秋以降、ラファエル前派と親交のあった画家C・A・コリンズとともに、ロンドンのウェルズ通りにあったセント・アンドリュース教会の礼拝に定期的に出席していたことが分かる。セント・アンドリュース教会は、S・W・ドウクス&ハミルトンズ設計事務所(S. W. Daukes and Hamilton)の設計によって1847年に建設された。この教会はビュージンの手による祭壇と聖水盤を擁し、当時からアングロ・カトリック的典礼の執行を重視した礼拝を行う教会として知られていた。ミレイによれば、その伝統的な礼拝形式は、当時アングロ・カトリック的典礼の執行を推進する勢力の二大拠点であったオックスフォードとケンブリッジにおけるアングロ・カトリック派の礼拝よりも厳格で格式があったという。したがって、ミレイが自ら、あえてこの教会の礼拝に出席することを決意し実行していた事実は、ミレイが当時厳格なアングロ・カトリシズムの信仰の持ち主であったことを示唆している。

ミレイはまた、少なくともこの頃アングロ・カトリック派の厳粛な礼拝式次第とアングロ・カトリック的礼拝空間の美しさに魅了されていた。19世紀中頃、にわかになり盛上がりを見せかけていたアングロ・カトリック的教会堂建築に対する関心が画家ミレイの美意識を捉えていたことは、彼の代表作《両親の家のキリスト》(Christ in the House of His Parents, 1849-50)によって明らかである。ミレイはこの作品で、当時オックスフォード運動の指導者の一人であったE・B・ビュージーの予型論的聖書解釈から着想を得ながら、キリスト教の中心的祭儀であり、キリスト教信仰における最も重要な典礼行為である聖餐式が執行される内陣空間を象徴的に描写した。

《両親の家のキリスト》では、聖書の象徴物が言わば演劇の小道具のように画面の随所に配置された。キリストの予型論的象徴である赤毛の少年が〈傷を負った左手〉を鑑賞者に向けて示すことによって、キリストの磔刑とその十字架上の死が文字通り提示されている。少年キリストの背後の壁に見える〈はしご〉と〈大工の三角定規〉はキリストの十字架上の死と三位一体の表象であり、〈はしご〉の中段にとまっている白い〈鳩〉は聖霊を、〈大工の作業台〉は祭壇を、それぞれ象徴している。画面の右側に立つ少年は、「らくだの毛衣」をまとう洗礼者ヨハネを表し、その手には〈聖杯〉が握られている。鑑賞者はこれらの注意深く描き込まれたキリスト教的象徴物の意味を解釈することで、①この作品がキリストの受難・十字架上の死、そしてイングランド国教会のアングロ・カトリック派にお

いて最も重要な典礼行為として位置づけられている聖餐の執行を主題としていること、②この作品がキリスト教会において〈最も神聖なキリストの犠牲が献げられる場所〉、すなわちほとんど例外なく教会内の東端に位置づけられる内陣空間を舞台としていること、を了解するのである。

しかしここで注目しなければならない点は、この作品の舞台が架空の内陣空間として描かれた際の、その描かれ方である。今日、広く一般的に受け入れられている見方に従えば、この作品に描かれた大工の仕事場は、教会内の東端に位置する内陣の最奥から西の方角に内陣空間を眺めた光景を象徴していると解釈されてきた。そうした見方は、画面右側後方に描かれた〈井戸〉を、アングロ・カトリック派が教会堂の西端部に設けるように主張していた聖水盤の象徴と見做すことで導き出された。架空の内陣空間を象徴するこの作品において画面の後方、遠景が西の方角であれば、必然的に作品の近景、さらにはこの作品の前に立って鑑賞するわれわれは想像上の内陣空間の東端に立っていることになるというのである。

しかし前述のとおり、ミレイがこの作品を制作していた前後にアングロ・カトリシズムに傾倒していたことを考えると、この解釈は信憑性に欠ける。ミレイは伝統的な聖像画の先例と同様、自分のこの作品が、絵画の中に込められた聖書の真理を読み解こうとする信仰深い信徒たちによって鑑賞されることを考慮に入れたに違いなく、そうした思いはおのずと作品の構図全体にかなりの影響を及ぼすことになったと考えられる。アングロ・カトリック派の典礼重視の立場に傾倒していたミレイが、教会内の内陣を大工の仕事場によって象徴させた際、教会堂の東端、内陣の最奥から、西側、すなわち身廊が位置する方向を見た状態を念頭において構図を決定したとは考え難い。なぜなら、そのような構図(東西の方角上の関係)で内陣の空間を描写することは、この作品を鑑賞するわれわれが、本来アングロ・カトリシズムが厳格に非聖職者の立ち入りを認めない内陣空間の最奥に立っているという状態を生み出すことになるからである。鑑賞者があたかも内陣の東端最奥の位置に立っているような状態で作品を描くことは、アングロ・カトリシズムの典礼理解の基本にある〈キリストの犠牲〉と〈平信徒〉の間に明確に介在すべき〈境界〉を無視することを意味し、アングロ・カトリシズムに傾倒していたミレイがそのような構図に基づく作品制作を構想したとは考えられない。

構想を練る段階で試作的に描かれたスケッチにおいて、当初大きくはっきり描写されていた井戸が、完成作品ではその存在感を劇

的に薄めたかたちで遠景の遙か後方に小さく描かれることになった事実注目すべきである。この井戸の描写方法をめぐってミレイが行った変更は、井戸が作品の中で特定の方角を指し示す役割を失ったこと、そしてこの作品の舞台が最終的にはアングロ・カトリックの礼拝空間のあり方と矛盾しないかたち、すなわちこの作品を鑑賞するわれわれは内陣の外側（西側）から内陣内部を見ているという設定で描写された可能性を示している。

ハンナ・アレントは「近代の解放と世俗化」について、それは「必ずしも神そのものからの離反によって始まったのではなく、天にいます人々の父である神からの離反によって始まった」と記している。アレントは〈世俗化した近代社会〉の起源を、キリスト教の神を否定しようとする態度ではなく、キリスト教信仰の伝統的ないし中世的な確信からの乖離を図った近代的態度に見出していたと言えよう。そして19世紀イギリスに興隆したアングロ・カトリシズムの典礼や礼拝空間に強い関心を持った芸術家たちの芸術創作活動は、まさにこうした〈キリスト教信仰の伝統的確信から乖離してしまった近代〉への抵抗であった。

(3) 中世を理想化するにいたった精神構造—信仰告白的芸術創作の実践

自由放任主義と功利主義が拡大したヴィクトリア朝イギリス社会では、市民社会全体の幸福に関わる諸問題に対処するよりも、一部の個人の利潤と損益、快樂の追求の方が優先された。そのような時代にも、シャフツベリー伯のような社会改良家が現われ、貧困層の人々の姿や生活がヴィクトリア朝期の文学作品の中で救済されるべき対象として扱われるようになったが、商業社会の功利主義的価値がなお大勢を占めたことに変わりはない。困窮した生活を送る下層階級の人々の存在に対して社会的関心が向けられることは稀で、それが向けられた場合にも、経済的バランスを大きく崩さないという条件付きのことであった。工場で過酷な労働に従事する労働者たちの就業条件や生活環境の改善が図られた場合にも、工場経営者の経営状況に深刻な影響を及ぼさないことが優先された。貧困問題から環境や衛生の問題に至るまで、社会的弱者の日常生活をとりまく諸問題に対する救済的処置は、あくまでも社会の経済、損益バランスの尺度に照らしてなされるべきものであった。

こうした時代に、ヴィクトリア朝期イギリスの自由放任主義社会には失われていた安定した社会のあり様、不動の秩序を中世に見出し、中世社会を理想とした社会改革の必要性を主張する傾向が生まれた。中世にヴィク

トリア朝期イギリスの社会にはない安定した公正な社会が実現していたに違いないという確信が、ひとつの潮流を生み出すようになったのである。そしてこうした中世理想化の傾向は、イングランド国教会においてはアングロ・カトリシズム、芸術分野においてはゴシック・リヴァイヴアルの芸術運動を強力に後押しすることになった。

ゴシック・リヴァイヴアルは、中世の建築、芸術と、それらを生んだ社会と精神との総合的リヴァイヴアルが正当であることを、芸術的観点からのみならず、道義的必要性から、さらには信仰的真理に照らして主張した芸術思想運動であった。ゴシック・リヴァイヴアルは、単なる中世の芸術の視覚的、空間的復興では決してなく、中世の芸術を生み出したキリスト教的中世の社会、精神、そして信仰のあり様を19世紀に再興することを重要な前提として含んでいた。その意味でこの芸術思想運動には、同時代の社会問題を直視し、変革を生み出そうとする社会改革運動の側面があった。

芸術家が19世紀イギリスの社会改革を念頭においてキリスト教的中世の再興を遂行するうえで、中世とヴィクトリア朝時代の間には、芸術を創造する際の作り手の動機の違いが存在した。中世ゴシックの時代においては、無名のガラス彩色職人や石工、木彫師たちが、個人の名が世に知られ、歴史に刻まれることを欲することなく、〈出来得る限り最高の作品を神に献げる〉という信仰的姿勢で芸術を生み出した。一方、自由放任主義と功利主義に基づいた社会では、キリスト教芸術ですらキリスト教信仰を教導するためではなく、作者である芸術家個人の自負心の表明や世俗的名誉の獲得のために、そしてJ・ブルクハルト (Jacob Burckhardt, 1818-97) の言う「近代的名声」を欲する意識に侵されながら制作されていた。そうした時代に、個人としての名声欲を断ち切って、キリスト教信仰の教義に奉仕する中世芸術とキリスト教的中世社会の復興に専心することは、時代の潮流との対決的性格を有し、芸術創造における信仰告白的行為と呼び得るものであった。

建築家A・W・N・ピュージンは1841年に著書『尖頭式あるいはキリスト教建築の正しい諸原理』(True Principles of Pointed or Christian Architecture, 1841)の中で、「ゴシックとは、様式ではない。それはひとつの信条である」と記すとともに、「人間に与えられている最大の特権は、この地上に生のある限り、神の栄光に寄与することを許されていることである。」とも述べている。また、ロンドン王立裁判所を手掛けた建築家G・E・ストリート (George Edmond Street, 1824-81) も、

その著書『中世における煉瓦と大理石』(*Brick and Marble in the Middle Ages, 1855, 1874*)の中で、「すべての芸術家には、今日のわれわれと、中世という最良の時代を生きた建築家、彫刻家、画家たちとを分離するひとつの崇高な事実を覚えてほしい。——すなわち中世の芸術家たちが、われわれにはない、芸術創造と信仰生活の実践に向けた真剣さと徹底した献身の決意を持ち合わせていたということ。」と記している。

ヴィクトリア朝期イギリスにおいてキリスト教的ゴシック・リヴァイヴァルの実践を試みたこれらの芸術家たちの言葉は、当時のイギリスにおいて中世を理想化するにいたった彼らの芸術創造行為の根本精神を端的に言い表している。それは厳格な中世主義者たちのキリスト教的社会改革の意志の表明であり、同時にゴシック・リヴァイヴァルという芸術表現がその基本において信仰告白的色彩を帯びたものであったことを今に伝えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計8件)

① Ariyuki Kondo, “Design as Emblem: The Royal Courts of Justice in Imperial Britain”, *Rigor and Relevance in Design* (Korean Society of Design Science-IASDR2009 Proceedings) 査読有, 10pp (CD-RM).

② Ariyuki Kondo, “Pictorial Reconstruction of Ecclesiastical Design: Anglo-Catholic Spatial Conception in John Everett Millais’s *Christ in the House of His Parents*”, *Design Discourse* (Design History Forum) (On-line Journal), 査読有, Vol. 4, No. 2, 2009, 12pp.

http://www.designhistoryforum.org/dd/modules/backup_issues/index.php?page=singlefile&cid=16&lid=34

③ 近藤存志, 「描かれた社会悪としての〈無関心〉— ホガース、ライト、ラファエル前派」、『フェリス女学院大学文学部紀要』、査読無、45号、2010年、pp. 31-60.

④ 近藤存志, 「絵画における教会建築的空間デザイン—ジョン・エヴァレット・ミレイの《両親の家のキリスト》に見られるアングロ・カトリック的空間の構想」、『デザイン史論』(デザイン史フォーラム)、査読無、4巻、2010年、pp. 22-32. (上記②の邦訳版)

⑤ Ariyuki Kondo, “Semi-Monastic Life and the Revival of Medieval-Gothic Designs: Artistic Creativity as a Confession of Faith”, *Design and Craft: A History of Convergences and Divergences*, 査読無, 2010, pp. 252-256.

⑥ 近藤存志, 「主題としての〈憐れみ〉と〈キリストの贖罪〉—ウィリアム・ホルマン・ハントとエドワード・バーン=ジョーンズ」、『フェリス女学院大学文学部紀要』、査読無、46巻、2011年、pp. 33-56.

⑦ 近藤存志, 「暴かれた現実とキリスト教的憐れみの実践—ラファエル前派が見た改良されるべき社会」、向井秀忠・近藤存志編『ヴィクトリア朝の文芸と社会改良』(音羽書房鶴見書店)、査読無、2011年、pp. 139-182.

⑧ 近藤存志, 「信仰告白としての芸術表現—ゴシック・リヴァイヴァルとキリスト教的〈社会改良〉」、向井秀忠・近藤存志編『ヴィクトリア朝の文芸と社会改良』(音羽書房鶴見書店)、査読無、2011年、pp. 247-271.

[学会発表] (計5件)

① Ariyuki Kondo, “Design as Emblem: The Royal Courts of Justice in Imperial Britain”, International Association of Societies of Design Research 2009 (Coex, Seoul, Republic of Korea), 18-22 October 2009.

② Ariyuki Kondo, “Semi-Monastic Life and the Revival of Medieval-Gothic Designs: Artistic Creativity as a Confession of Faith”, ICDHS 2010: 7th Conference of the International Committee of Design History and Design Studies (Paleis der Academiën, Brussels, Belgium), 20-22 September 2010.

③ 近藤存志, 「〈芸術〉に対する〈信仰〉の勝利—近代イギリスの宗教的・愛国的芸術と文学テキスト」、日本キリスト教文学会第405回月例研究会)、桜美林大学四谷校舎、2011年1月8日.

④ Ariyuki Kondo, “Design, Space and Ceremony: Nationalistic-Religious Allegorical Themes in the Gothic Revival”, Annual Conference of North American Victorian Studies Association (Vanderbilt University, Nashville, TN, USA), 3-6 November 2011.

⑤ 近藤存志, 「近代芸術文化における教会堂建築」、日本建築学会建築歴史・意匠委員会西洋建築史小委員会主催第2回西洋建築史若手研究者研究発表会、東京・建築会館、2011年11月19日.

[図書] (計1件)

近藤存志, 教文館、『(仮題)キリストの肖像—ラファエル前派と19世紀イギリスの画家たち』、2012年秋刊行予定、約200頁.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

近藤 存志 (KONDO ARIYUKI)

フェリス女学院大学・文学部・教授

研究者番号：00323288